

コーディネーターとしての事業に対する意見シート

■事業名: チャレンジド自立支援事業

■コーディネーター氏名・所属: 吉島隆子 (特活)コミュニティ・シンクタンク「評価みえ」

■ふりかえり会議開催年月日: 平成17年3月22日 19:00~21:00

1. 協働のプロセスについて意見

平成17年2月4日に「e ふおーらむ」関係者、三重県地域振興部および生活部との意見交換がもたれた。その時点で、中間の意見交換がなく、お互いの意思疎通に欠けていたという共通認識から、ふりかえり会議直前の3月16日に「e ふおーらむ」のリーダー、スタッフと地域振興部担当との意見交換の場がもたれた。このことにより明らかのように、双方のコミュニケーション不足が大きな課題であった事業である。

したがって県側担当者によるチャレンジドや支援者など現場サイドの現状把握、理解もそれまで十分ではなく課題を残した。

2. 成果についての意見

当初、3年で「e ふおーらむ」の自立が計画されたが、全国的にも先進的な取り組みであり、社会に与えたインパクトは大きいものの、解決しなければならない課題も多く、残念ながら十分な成果を挙げるに至っていない。

「e ふおーらむ」側の営業努力により、60数名のチャレンジドの登録や企業など支援者の輪は広がっているものの、IT業界の不振などにより成果は思わしくなく、今後、継続的な取り組みが求められる。

3. 課題・改善の整理とまとめ

ITを活用した在宅就労はよいが雇用には結びつかないなど課題もある。また、お互いの役割分担の確認や現場との定期的なコミュニケーションの場の設定など、今回のふりかえり会議を契機として、よりよい協働をめざすべく改善が求められるとともに、三重県として本腰を入れた取り組みになっていなかった可能性もあり、今後の政策課題としてより一層の取り組みが期待される。

4. 事業全体についての意見・感想(自由に記入してください)

協働事業としての前提、基礎の重要性を再確認した事業であった。現場の声を聞くことの大切さを改めて感じた。

コーディネーターとしての事業に対する意見シート

■事業名: チャレンジド自立支援事業

■コーディネーター氏名・所属: 浦田宗昭・いせ市民活動センター

■ふりかえり会議開催年月日: 平成 17年 3月22日

1. 協働のプロセスについて意見

産官学によるバリアフリーの実現を図る事業としてはじまる。もともと県の主導ではじまったものであり、事業そのものは委託事業と言える。県の担当者が現場で事務局を担ってきた。3年間で受益者(障害を持った方々)の自立をめざしていたが、現実的には難しいということが分かってきた。受益者(障害を持った方々)の自立というよりも教育的なことに力を入れて事業を進めてきた。事業を進めるプロセスで、中間期には話し合いが十分に持たれずにいたが、完了期には話し合いが持たれるようになってきていた。一応は事業終了となるが、行政、NPOともに、この事業の必要性を感じている。3年が終了しても何らかの形でこの事業は継続することを望む。また、行政、NPOともに危機感を感じており、問題点などをもっと話し合いをして出しておけばよかったと感じている。目的や成果物の見直し、役割分担の確認、目標設定の変更等、両者間で協議を重ねることを期待する。

2. 成果についての意見

行政、NPOともに共通認識であるが、当初考えていた自立支援システムは得られることはなかった。単純に成果物として考えれば、当初の考えとは違うものとなった。しかし、行政もNPOも自分たちのやれる形で事業を続けたたいと考えている。これは、障害を持った方々の自立支援には、非常に時間がかかることが分かってきたからである。また、大きな意味で成果が違うものとなったわけではない。もともと考えられていた成果物とは少し違うものの、行政にとってもNPOにとっても、事業の必要性、目的の共有、役割分担、事業の進め方等、確認する姿勢ができ始めているのは、大きな収穫であると思われる。

3. 課題・改善の整理とまとめ

行政とNPOの間で十分な話し合う機会を持ち、行政としての責任を持つ必要がると感じる。特に行政には、最後まで責任を持ってもらいたい。

また、行政の人事についても市民側から評価の高い職員を事業途中で変更する場合は、市民に対して安心感を与えるような対応を望む。人事異動はしかたのないことであるが、市民や事業に対する責任は最後まで持ってもらいたい。

また、3年間の事業の中で行政NPOともに感じていた課題である、(1)話し合いの

場を持つこと、(2)協定書を作ることを確認することができたことは大きな収穫である。当初の3年間というよりも、もう少し長いスパンでの事業計画が必要なものなのかもしれない。

4. 事業全体についての意見・感想(自由に記入してください)

最初はやや堅苦しい雰囲気もあったが、後半は和やかな会議となった。障害者の自立支援というのは、行政もNPOにとっても難しい課題ある。より多くの方を巻き込んでいくべき事業のように感じた。また、この事業のように委託に近い形の場合、特に行政は現場のことをしっかりと受け止めながら、県の方針なり、部としての事業の位置付けをしっかりとNPO側に伝えてもらいたいものである。また、現場に入る行政職員、入らない職員どちらも大切であるが、現場に入る職員がもう少し評価されることを望む。